

多喜二とロマン・ロラン

―幻の抗議文をめぐる―

高橋 純

1932年2月20日に小林多喜二が特高警察の手で殺された後、かのフランス人ノーベル賞受賞作家ロマン・ロラン（1866―1944）がこの事実を知って抗議文を書き、これがフランス共産党機関紙「ユマニテ」に掲載されたという伝説的な逸話がある。

その伝説は以下のようにところに痕跡をとどめている。多喜二研究者の手塚英孝氏の『写真集小林多喜二―文学とその生涯』（新日本出版社、1977年）に添えられた年譜の末尾1933年の項には、「ロマン・ロラン、鲁迅をはじめ、内外から多数の抗議

と弔文がよせられた」と記されている。

また、1931年に渡仏して長らくパリで暮らした日本人彫刻家・高田博厚（ひろあつ）（1900―1987）は後年書いた回想録『分水嶺』（岩波書店、1975年）で自身の体験としてこう語っている。少し長めの引用になるが、本論での検証作業にとって決定的に重要なものなので該当部分をすべて紹介する。引用末尾の括弧つきの一文は、この回想録が前年1974年に最初雑誌『世界』に掲載され、翌年単行本化の際に高田自身が挿入した訂正文である。



ロマン・ロラン



小林多喜二デスマスク（千田是也・佐土哲二＝共作・小樽文学館蔵—1933年2月21日深夜から翌朝にかけて取られたもの。特高の弾圧の危険性から生乾きのまま外されたため多喜二の髪の毛が付着していたといわれている）

「私は思いがけぬ機会に会って、間もなくイタリア巡礼に出た。そしてこの年の夏にクラマールに移り、十一月にはスイスのロマン・ロランの家に、ガンジーに会いにでかけた。この期間のいつ頃だったかは覚えていないが、ある日日本から嚴重な封をした郵便小包が届いた。開けてみると『無産者新聞』で、小林多喜二が拷問獄死した追悼の特別号である。遺骸を囲んだ『同志』たちの大きな写真が載っている。これをフランスの同志たちに伝えてほしい。抗議の文を『ユマニテ』紙に出してほしいと手紙が添えてあった。

私はその新聞を持ったまま、市街電車に乗り、座席で広げて読んでいた。日本語だから誰にもわかりっこない……ふと眼をあげると、私の前につり革にぶらさがって日本人が立っており、びつくりしたような顔で私を見ている。間もなく後に知り合ったのだが、これが嬌野満州雄だった。『パリに着いたばかりで、電車に乗ったら、『無産者新聞』を読んでいる奴がいる。あんなにおどろいたことはなかった』

『ユマニテ』紙に抗議文を出すのになんかどうしようか？ 共産党首のマルセル・カシャンと親しい画家のポール・シニャツクが私を大事にしてくれているので、まず彼に相談した。

INTERNATIONALES

de nos correspondants particuliers et des agences

Pour son action contre la guerre LE DEUXIEME PLAN QUINQUEN

KOBAYASCHI ÉCRIVAIN RÉVOLUTIONNAIRE ASSASSINÉ A TOKIO PAR L'IMPÉRIALISME NIPPON

Tokio, 14 mars. — Kobayashi est un écrivain japonais, né à Tokyo. Les professeurs de la faculté de lettres de l'université de Tokyo ont été surpris de sa mort. La nouvelle a provoqué un grand émoi. Kobayashi était un écrivain révolutionnaire. Il avait écrit de nombreux ouvrages sur la révolution. Il était considéré comme un des plus importants écrivains japonais de son époque. Sa mort a été considérée comme un acte de répression. Les autorités japonaises ont déclaré que Kobayashi était un agent étranger. Cette affirmation a été rejetée par les révolutionnaires japonais. Ils ont déclaré que Kobayashi était un écrivain japonais de renom. Sa mort a été considérée comme un acte de répression. Les autorités japonaises ont déclaré que Kobayashi était un agent étranger. Cette affirmation a été rejetée par les révolutionnaires japonais. Ils ont déclaré que Kobayashi était un écrivain japonais de renom. Sa mort a été considérée comme un acte de répression. Les autorités japonaises ont déclaré que Kobayashi était un agent étranger. Cette affirmation a été rejetée par les révolutionnaires japonais. Ils ont déclaré que Kobayashi était un écrivain japonais de renom.

Les succès de la production automobile en U. R. S. S.

Moscou, 14 mars. — L'Union soviétique a réalisé de grands succès dans la production automobile. Les usines automobiles ont produit un grand nombre de voitures. La production a augmenté de manière significative. Les autorités soviétiques ont déclaré que la production automobile était en pleine croissance. Elles ont déclaré que les usines automobiles étaient capables de produire un grand nombre de voitures. La production a augmenté de manière significative. Les autorités soviétiques ont déclaré que la production automobile était en pleine croissance. Elles ont déclaré que les usines automobiles étaient capables de produire un grand nombre de voitures. La production a augmenté de manière significative. Les autorités soviétiques ont déclaré que la production automobile était en pleine croissance. Elles ont déclaré que les usines automobiles étaient capables de produire un grand nombre de voitures.

「それはぜひ出さなければいかん！」と彼の方が大乗気だが、私の名は出せない。「まず、スイスのおやじさんに相談してみろ」。私はロランに書いた。即座に返事が来て、「私が全責任を負う。今フランスは反動政府だから、君の名を出したら、いっぺんに追放されてしまう」。私は新聞の記事の大意をフランス語で書いて、新聞といっしょに彼の許に送った。『ユマニテ』紙は全面をあげて、ロランの抗議文と小林

の遺骸の写真を転載した。(小林の死を一九三三年のように思っていたが、一九三三年だったと知らせてくれた人があった。またその頃『無産者新聞』はすでになく、『赤旗』に変わっていたという。)

このようにしてその存在が伝えられた「ロマン・ロランによる多喜二虐殺抗議文」はしかし二十一世

「ユマニテ」1933年3月14日第3面

まず、当然ながら、「抗議文」がユマニテ紙に載ったというのなら、多喜二殺害の翌日からのこの新聞のバックナンバーに当たってみればよい。すると案の定といえるかのように1933年3月14日(多喜一の死後22日)

Nouveau coup de force du gouvernement autrichien

Vienna, 14 mars. — Le gouvernement autrichien a pris une décision importante. Il a décidé de...

のユマニテ紙第3面に、ロランによる抗議文とは違
うがこれに関連すると思える多喜二虐殺を報道する
記事が現れた。

「小林多喜二が東京で殺害された！」という書き
出しのこの記事はこう続く。「この犯罪の噂はわず
か数日前にフランスにも伝わってきた。／この
ニュースは——記憶に新しいところだが——A・E・
A・R.の猛烈な非難を呼び、ロマン・ロランの呼
びかけに応じてこの犯罪に対する無数の抗議の声が
湧き起こったのだった。／いまやこのニュースは確
証された事実である！／小林！……その名は世界を
駆け巡った！」(A・E・A・R.は革命的作家芸術家
協会と訳される。ファシズムと戦う超党派の作家・
芸術家が団結して1932年3月に創設された——筆
者注)

なんとここにすでにロマン・ロランの名が現れて
いるではないか。ならばこの後さほど間を置かずに
今度はロラン自身の手になる抗議文がユマニテの記
事となって現れることだろうと期待される。ところ
がいくら丹念に読んでみてもこの年の12月31日まで

のユマニテにはそれらしい記事は出てこない。もし
かしたら翌年に出るのかもしれないと考えてさらに
1934年バックナンバーを閲覧するも、期待外れ
で大晦日までたどっても目的のものは見つからな
い。半ば諦めかけるが、なお辛抱して成果のないま
ま1935年8月15日版ユマニテをめくったところ
でひとまずこの閲覧作業を取りやめた。理由は、こ
の日はフランスの新印象派画家ポール・シニャック
の命日だからだ。先に引用した高田の記述に従うな
らば、高田の最初の相談相手で、高田に「ロマン・
ロランに頼め」とアドバイスした人物なのだから、
シニャックの死後にロランの「抗議文」が書かれた
可能性は限りなく低いからだ。

そこで別の手がかりを求めて1933年3月14日
のユマニテを再度仔細に読み直す。するとこの記事
は書き出しからして尋常ではないのだ。まず、「こ
の犯罪(多喜二殺害)の噂は数日前にフランスに伝
わっていたものの、その時は不確実な情報だった
が、今このユマニテの記事として報道するのは事実
として確証されたものだ」と、多喜二殺害のニュー

Contre l'assassinat de Kabagashi

Seidski Kabagashi vient d'être assassiné à Tokio par la police japonaise !

Seidski Kabagashi était ce jeune écrivain prolétarien dont les amis de l'A.E.A.R. avaient pu apprécier le grand talent au cours des lectures faites dans la soirée organisée l'année dernière contre la dissolution du R.O.P.F.J. le front culturel rouge japonais.

Il a été assassiné parce qu'il luttait contre l'ignoble guerre d'agression du Japon contre la Chine, parce qu'il luttait contre l'un des impérialismes qui préparent l'incendie mondial, contre la bourgeoisie qui vise en premier lieu l'U.R.S.S.

L'A.E.A.R. proteste contre la terreur bestiale que font peser les gouvernements impérialistes sur les masses laborieuses, elle flétrit ces lâches assassinats que la classe ouvrière vengera un jour collectivement par la Révolution. Elle appelle, pour cette lutte révolutionnaire, le ouvrier et les intellectuels à s'unir et à s'organiser dans un front de combat, contre les gouvernements assassins impérialistes.

Feuille Rouge 2 号 2 面

「小林殺害に抗議せよ！

小林多喜二が警察の手によって

東京で殺害された。

小林多喜二は、昨年、コップ（日

本プロレタリア文化連盟）の解体

に対する抗議集会において朗読さ

筆者はこの一節を、隣国ドイツのみに限らぬ全世

礎である基本的自由および権利を停止させてしまったのである。我々は訴える、人および市民の尊厳を陵辱する卑劣な犯罪行為への怒りと、そして、こうした臆面も齒止めもない犯罪に走るテロリズムと戦う者を結束させる連帯の意志とを我々と分かち合うかぎり、いかなる党派に属そうとも、ヨーロッパもアメリカも問わず、すべての作家、すべての世論の代弁者が、我々の抗議の声に唱和せんことを。」

界のファシズムの猛威に抗する戦いへの呼びかけと解釈できると思った。すると二日後（3月7日）立て続けに出された Feuille Rouge（フイユールージュ）第2号裏面中段右側に「小林殺害を許すな」と題された記事が見つかった。

そこに現れる日本人名は実際には Kabagashi (Seidski Kabagashi) と実に不正確に綴られているが、本文を読めばこれが小林多喜二を指していることは疑いようもないし、先に一部引用した3月14日のユマニテの記事から予想できた不確定情報であろうという推測とも一致する。

れ、A. E. A. R. の同志等からその偉大な才能を高く評価されたプロレタリア作家その人である。

彼が殺されたのは、日本が中国に仕掛けるおぞましい侵略戦争に反対して戦ってきたからであり、世界中に火を放とうとする帝国主義の一員に抗し、ひたすらソ連を目の敵にするブルジョワジーに抗して、戦い続けてきた故になのである。

A. E. A. R. は、帝国主義政府が勤労大衆支配の手段とする獣並みのテロに抗議するとともに、この卑劣極まる殺害を、いつの日か労働者階級が一九一七となって「革命」を通じて報復するであろうものとして銘記する。A. E. A. R. は、こうした革命闘争に向けて、労働者と知識人が結集し、帝国主義的殺人集団政府に対抗する戦線を組むべく訴えるものである。」

これこそがフランスで多喜二虐殺が伝えられた本当の第一報だったのだ。そしてここには日本人の我々にとって驚愕的な事実が記されている。「昨年」つまり一九三二年とは、その春日本でコップに大弾圧が加えられて共産党員の大量検挙が起こり、その後犠牲者は不当裁判にかけられ過酷な刑を科せられ

ることになった年であるが、記事はその同じ年その事件の後になんとフランス（パリ）でこの弾圧に対する抗議集会がもたれていたと言っているのだ。さらにその集会の場で多喜二の作品（文章の一部？）が朗読され、彼の才能は、A. E. A. R. の同志から高く評価されたと言う。この時日本では、特高警察の手を逃れた多喜二は地下に潜伏して行方は知れないが存命であり、拷問死するのは翌三三年二月二十日である。

にわかに信じがたい話だが、この記事が本当に事実を伝えているのだとしたら、それはA. E. A. R. が主催したに違いないが、新聞紙上で語られるくらいだから、この

A. E. A. R.
N'oubliez pas ! que l'A.E.A.R.
organise le mercredi 29 juillet
à 20 h. 30, à la salle du Grand
Orient, 16, rue Cadet, une
SOIREE JAPONAISE
Une conférence sera faite par JEAN
LÉVY, sur le front culturel rouge
japon.
Allocution de VAILLANT-COUTURIER
Leçons de japonais, poésie, musique sym-
phonique du Japon, par les camarades
de la L.I.O.L.
Exposition de journaux, de dessins,
tracts illustrés, etc.
Participation aux frais : 3 francs ;
3 francs pour les membres de l'A.E.A.R.

「ユマニテ」1932年7月19日
第4面右下の広告

集会に関する情
報が一般読者も
目にできる場所
に見つけられる
可能性があるだ
ろう。A. E.
A. R. は共産

党に近い組織なのだからやはりユマニテのバックナ
ンバーを、日本でコップ弾圧が始まった同年春から
後を精査していく。すると1932年7月19日のユ
マニテ第4面右下に5センチ四方の小さな広告があ
り、ここにもA. E. A. R. の字が見える。確かに
それはA. E. A. R. 主催の「日本の夕べ」という
集会への案内なのだった。

A. E. A. R.

A. E. A. R. (革命的作家芸術家協会) 主催による、7月20
日水曜日格蘭・トリアン・ホール(カデ街16番地)にて20
時30分開催の「日本の夕べ」をお忘れなく!

* Jean LOUBES (ジャン・ループ) による日本赤色文化戦
線に関する講演

* Vaillant-Couturier (ヴァイヤン・クチュリエ) の挨拶

* フランス・プロレタリア文化連盟同志による、革命的日本

の詩、小説、演劇作品の朗読

* 新聞、絵、挿絵つきビラ等の展示

参加費5フラン…A. E. A. R. 会員3フラン

(ジャン・ループについては詳細不明だが、1946年に小

説 Le Regret de Paris でドゥー・マニ賞を受賞。ヴァイヤン

＝クチュリエは当時のユマニテ編集長でA. E. A. R. の創

立者——筆者注

時系列に沿って対応関係を見るならば、「日本赤
色文化戦線」をテーマとしたこの集会がまさに同時
進行していた日本でのコップ弾圧への抗議の場とな
り、その中で多喜二の作品が「朗読」され、「才能
を高く評価された」のであろうという推理に無理は
感じられない。筆者はこれを見つけた時、弾圧から
逃れてどこかに身を潜めていた多喜二がひよつこり
パリの街角に現れたその生身の姿を目撃したかのよ
うにさえ思われた。ありえない話だが、実際に起き
た出来事のように想像できたのだった。ともかくこ
こに至って、初めて断言できることがある。小林多
喜二はその死後にロマン・ロランが虐殺抗議文を本
当に書いたか否かに関わりなく、生前すでにパリで、
フランスで、才能あるプロレタリア作家として高く
評価されていたのだという事実を伝える証拠がここ
に発見されたということである。これはもはや「伝

説」ではないのだ。

検証作業がこういう形で展開し事ここに至ると、「ロマン・ロランによる多喜二虐殺抗議文」の存在は限りなく否定的と思わざるを得ないだろう。そして、そうなるに先に引用した高田博厚の証言のいかがわしさは増すばかりだ。まして、高田の言によれば、大戦末期の1944年8月、ベルリンへの移動を余儀なくされた際、パリのアトリエに残した手紙類を含む所持品一切をフランス政府に没収され、戦後パリに戻った時にも返却してはもらえなかったから、ロマン・ロランからの手紙も永遠に失われてしまったと言うのだから、これは「真犯人しか知りえない事実」として語られた作り話なのではないかと疑われても仕方のないことだ。

だがしかしここで、高田嘘つき説を性急に結論づけることを避けて、体験談を虚心に読み直してみる。彼はなぜ雑誌掲載時の読者から指摘された矛盾を認めて、単行本化の際に「(小林の死を一九三二年のように思っていたが、一九三三年だったと知らせてくれた人があった。またその頃『無産者新聞』はす

でなく、『赤旗』に変わっていたという。）」と付言しながら、本文を一字も訂正・修正しなかったのか。それは44年超昔の体験を語りながら、そこに自身にも判然としない記憶間違いがあったとしても、自分は自分の記憶に留まっている限りの真実を語っているのだという確信に近い思いがあったからではないか。

後に日本で優れた社会評論家として名を成した嬉野満州雄がパリを訪れたのは間違いなく1932年の夏だった。嬉野は高田の回想録が書かれたときには存命だった。だから、もしも高田の体験談が意図して作られたものだったとしたら、高田はそこにストーリー展開の矛盾を指摘できる生き証人を登場させはしなかっただろう。高田が語る「ロマン・ロランによる多喜二虐殺抗議文」は1932年に書かれたことになってしまうと見抜けたのは、1932年の夏に訪れたばかりのパリの電車の中で高田と遭遇した嬉野ただ一人だったのだから。この一事を踏まえると、高田の体験談は意図的な作り話ではなく、記憶違いがあったとしても、それぞれのエピソード



「ユマニテ」1932年9月29日第1面

には何らかの実験の裏付けがあると考えることができるだろう。

そこで一つの思考実験をしてみる。1932年の8月頃にパリの電車（当時はメトロよりもトラムのほうが多かった）の中で二人が遭遇した。その時に高田が読んでいた日本語の新聞（「無産者新聞」ではない）には日本の知人がそれに対する「抗議の文」をユマニテに載せてくれと頼むような記事が出てい

た。ポール・シニャックのアドバイスを受けて、高田はスイスのロマン・ロランにどうしたらよいか相談した（記事の内容は高田がフランス語に翻訳しなければロランには当然伝わらない）。ロランはすぐに返事をくれて、件の記事をユマニテに掲載すべく仲介の労をとると応じてくれた。次いでユマニテも協力してくれて、問題の記事が「全面」に掲載された（写真があるとしたら無論多喜二の遺体ではない。ロランの言葉があるとしても無論それは多喜二虐殺抗議文ではない）。そして高田はこの記事を読むことができた。

この推理が正しいか否かは、その夏以降のユマニテ紙を読み直していけば答えにたどり着くはずだ。すると案の定というべきか、1932年9月29日版ユマニテ「第1面」が現れた。見出しには「日本の白色テロ」（La terreur blanche au Japon）とある。

日本の白色テロ

我々のもとにロマン・ロランから書簡が届いた。以下にこれを、■本共産党の訴えと併せて掲載する。

我々の同志は自国「日本」においてこの上なく英雄的な反政府運動を展開しているが、この間の犠牲者は数千の数に上っている。彼らはその活動を非法法で行うしかないゆえに、以下で日付を突き合わせてみれば、活動の裏付けとなる文書資料をこのヨーロッパにまで届けるためにいかに大なる犠牲を必要としたかがわかるだろう。

日中戦争開始「1928年の斉南事件等」以降、またフランス帝国主義に援護された満州事変以降、我々が同志に向ける攻撃は非道さを増すばかりである。

ここにおいて西欧プロレタリアートは、その同志たちが果敢な抵抗運動において示す勇氣に胸打たれずにはいられない。先のアムステルダム会議「1932年8月の世界反戦大会」において緊要とされたことがある。それは、すべてのプロレタリアート、なかんずく社会主義的勤労大衆を促して、日本の革命的人民との連帯を表明し、東京の帝の同盟者たるこの国の政府を含む彼らの迫害者に圧力をかけることである。

以下がロマン・ロランからの手紙である。

親愛なるマルセル・カシャン、

日本から私のもとに知らせが届いています。そこに同封されていた日本共産党の訴えをあなたに託しますが、これは党の非法法新聞に掲載されたものです。有罪宣告を受けた不幸な人々を救える可能性は無きに等しい。しかし彼らの同志たちは世界に向けて、せめてその憤激の叫びを届かせたいと、悲痛な訴えを送ってきているのです。私はあなたならばこの訴えを「ユマニテ」紙上に迎えてくださるものと考える次第です。

敬具

ロマン・ロラン

国際プロレタリアートに訴える

全世界の同志、労働者、農民、勤労大衆、プロレタリアの諸君！

さる7月5日、天皇の法廷（軍国ファシズム掌中の傀儡にすぎない）において検事総長は、191名の我々が同志に対し、死刑、無期懲役、総計1000年に及ぶ禁固刑という過酷極まる求刑をした！

この191名は犠牲者のわずか一部にすぎない。1928年以降（すなわち1928年3月15日の大量検挙、1929

年 4 月 16 日の検挙等）テロ体制の下で繰り返された大量検挙により何年にもわたって投獄されてきたコミュニストの犠牲者は幾万の数に上るのである。この 1911 名は日本のコミュニストの前衛であり、ブルジョワ政府と果敢に闘って日本の労働者、農民、勤労大衆の立場を守り、彼らを新たなソヴィエト政府の建設へと導いてきたのだった。

（一略）

同志諸君！諸君のもとでも革命的労働者に対するテロと暴虐が見られるであろう。

我々が極東にあつては、中国において、韓国において、台湾においても、白昼堂々革命家に私刑が加えられ、法の裁きもなく殺害されてしまうのである。

だがしかしわれわれはなおも現状に立ち向かうことができるであろう、我々が 1911 名の同志の解放を求める全世界の人民大衆の大いなる運動に支えられ、すべての国のプロレタリアの抗議の声に支えられるならば。

われわれは全世界のプロレタリアに訴える、我が国の帝国主義の犠牲者の解放を願う諸君の力強い支援を求め、待ち望んでいる！

死刑、無期懲役、総計 1000 年に及ぶ禁固刑を宣告され

た 1911 名の日本コミュニストを即時釈放せよ！

白色テロに抗議せよ！

中国におけるソヴィエト革命を擁護せよ！

日本による満州国植民地化反対！

日本陸海軍は中国から即時撤退せよ！

帝国主義戦争に反対せよ！

1932 年 7 月 20 日／日本共産党中央委員会

この記事の冒頭ではここに日本のコミュニストの「訴え」を入手するに至った経緯が述べられ、次にロマン・ロランから共産党首マルセル・カシャンにユマニテへの掲載を依頼する手紙が掲げられ、それに続いて日本のコミュニストが非合法新聞で世界のプロレタリアートに向けて発した「抗議文」がフランス語に訳されて出現したのだ。

その出現の経緯は高田が回想録で語っていた通りだと言っている。ここに仏訳されて、末尾に 1932 年 7 月 20 日付の入った日本共産党中央委員会のアピールは、実際に非合法共産党機関紙『赤旗』^{せっぽう} 1932 年 7 月 30 日版第 2 面に載ったもの



『赤旗』1932年7月30日第2面

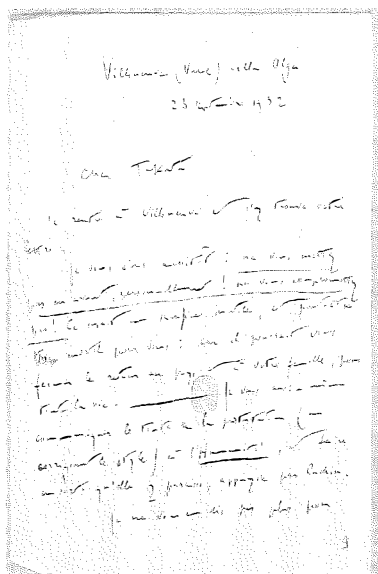
なのだ(仏訳は量的には半分以上省略がされている、高田が「記事の大意をフランス語で書いて」ロランに送ったと言った通りに)。

写真の件について一言いうならば、無論それは多喜二の遺骸ではなく、靖国神社境内にある「遊就館」(記事のキャプションには戦争博物館とある)前に仏軍海兵が整列した写真が併載されており、その写真下には、「フランス帝国主義はおのれの軍隊をして、同盟国日本が満州において達成した略奪行為の経験から学ばせんとしている」と皮肉を込めた説明

が付されている。明らかにこれはユマニテ編集部が選んで併載したものだ。

ここまでの検証作業を経て、小林多喜二はロマン・ロランというビッグネームの威光に与らずとも優れた日本のプロレタリア作家として生前すでにフランスで高く評価されていた事実、そしてまた、ロマン・ロランは、多喜二という特別な個人のために筆を執ったか否かはいざ知らず、当時の日本においてその反戦運動ゆえに迫害された数多の無名の犠牲者の声を世界の同志に届けることに手を貸してくれた事実、これらの事実は明快かつ明確に立証できたと信じる。

しかしただ一つ筆者にとって不足と感ぜられることがあった。それは、1932年9月29日のユマニテ第1面に同年7月20日付の日本共産党中央委の「抗議文」が掲げられるために裏で奔走したのが高田博厚であったことを示す証拠といっても、記憶間違いを含んだ本人の体験談しかないことである。だから筆者は高田のために真正の証拠に値するものを見つけないと思った。



ロマン・ロランから高田宛の手紙
(1932・09・23)

そのようなものが見つかる可能性があるとしたら、それはパリのフランス国立図書館 (BnF) である。そこには「ロマン・ロラン寄贈文書庫」(Fonds Romain Rolland) が設けられており、ロランの死後に残された未公表の日記や書簡類もすべて収蔵されているという。ならばその中に件の「抗議文」のユマニテ紙への掲載に関わるやり取りのわずかな痕跡でも発見できる可能性はゼロではないはずだ。そこで筆者はBnFを訪ねた。そして求めた結果を得ることができた。ここでは紙幅の都合で詳細は省くが、驚くべきことにそこにはロランと高田がそれぞれに

宛てた計23通の手紙が誰にも知られることなく眠っていた。そのうちの1通をここに紹介して本論の締めくくりとしたい。

それは、1932年9月23日付けで、あのポール・シニャックが高田に「まず、スイスのおやじさんに相談してみる」と勧めたその人であるロマン・ロランからの取り急ぎの返信だったのである。それは同年7月20日付けの日本共産党中央委の「抗議文」がフランス語に訳されてユマニテの第1面に出現する6日前に書かれたものだった。

親愛なる高田へ

ヴィルヌーヴに戻り、あなたの手紙を見つけました。

取り急ぎこれを書いていきます。あなたが個人として前面に出てはなりません！ あなた自身が巻き添えになるようなことをしてはなりません！ 敢えてそれをすれば無用の犠牲を払う羽目に陥りかねないし、おそらくあなたにとって致命的なことになるでしょう。なぜなら、「日本政府」はあなたの生涯にわたって、国に帰る道も、家族のもとに戻る道も閉ざしてしまいかねないからです。

これから私自身の

手で抗議文を（訳文を修正したうえで）ユマニテに送り、カ
シヤンの支持を得て紙面に載るように計ります。

今日のところはこの件についてこれ以上は言わずにおきま
す。私としては何よりも、あなたが性急にことを進めた挙句
あなた自身に危害が及ぶようなことがないように願っている
のです。今はもう、日本の友に書いてもよいし、知らせても
かまいません、任務は果たした、R・R.が引き受けた、と。

心をこめて、

ロマン・ロラン

もはや微塵^{みじん}の疑いもない。非合法新聞の軍国主義
日本政府告発の記事をフランスの新聞に公表すると
いう、情報源が知られればその者の身に危険が及ぶ
にちがいない「任務」を、高田の身を案じたロマン・
ロランが代わって（訳文を手直ししてまで）果たし
てくれたのだ。そして6日後には約束通り、ユマニ
テ紙第一面に「日本に於ける百九十一人の共産主義
者の求刑に對して國際プロレタリアート勤勞大衆に
訴ふ」日本共産党中央委員会の「抗議文」（1932

年7月20日付）が掲載されるに至った。

この時多喜二は生きていた、およそ半年後には彼
も同じ迫害の歸らぬ犠牲者となるのだが。

『赤旗^{せっき}』に載ったその原文のほうを彼は潜伏先で
読んでいたことだろう。しかしその2ヵ月後には同
じ「抗議文」がなんとフランス人の同志たちにも読
まれたのだという事実があったことを、多喜二とい
えども、願いはしたとしても、想像しえなかったこ
とだろう。

しかし、今私たちは想像できる、ここに反戦平和
を願う人々の国際連帯が実現していたことを、その
時生きていた多喜二が知りえたとしたならば、どれ
ほどの喜びに胸震わせたことだろうかと。

（たかはし あつし・小樽商科大学名誉教授）